動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合
〒260 千葉市中央区要町２番８号（動力車会館）
電話｛（鉄電） 千葉 2935・2936番
（公） 043（222）7207番

93.3.4 No. 3750

―大幅賃上げ獲得！強制配転者の原職奪還の闘いを結合し―

93春斗勝利！第2波斗争へ

貨物への格差拡大阻止こそ最大の焦点

動労総連合は、九三年四月一日以降の新賃金及び労働条件改善に関して、二月二四日、申八号（東日本）申九号（貨物）を発出した。（要求骨子別掲）

これは本年一月に、全組合員を対象に行なった「生活実態と賃金引き上げ要求」調査をまとめたものである。

調査結果によると、昨年同期に比して組合員の生活実態は、「非常に苦しくなっている」が三〇％、「やや苦しくなっている」が四一・一％、「同じだと思う」が二七・四％となっており、九八・五％の組合員が改善を強く求めている。

また、「家計は一ケ月の賃金で間に合いましたか」の項では、九二％の組合員が不足したと答え、期末手当（三九・五％）妻の収入（二四・三％）貯金をおろす（二二・四％）等によりその補填をしているとしている。

さらに、諸手当改善をはじめ制度改訂を強く求めていることが明らかとなっている。

われわれは、**九三春闘において大幅賃上げ獲得（新賃金要求四二,〇〇〇円）**に向けて、ストライキも辞さず闘い抜かなければならない！

そして今九三春闘の最大の焦点は、貨物への格差拡大を断固阻止することである。

ＪＲ貨物会社は、「景気後退」「経営悪化」を理由に、昨年末手当についてＪＲ発足後最大の格差＝二・六ヵ月の超低額を強制した。昇給・一時金（夏季・年末手当の合計）についても格差につぐ格差の歴史に他ならない！（別表参照）

「分割・民営化」の矛盾と破産を、貨物の労働者への賃金抑制（格差）と、「貨物八〇〇〇人体制」（大合理化＝人員削減）に集約するＪＲ貨物会社の姿勢こそ、許さざるものなのだ。

今春季闘争は、二・一九第一波貨物ストから開始されている。この闘いの成功と意義をさらに第二波の闘いへ結びつけよう！

九三春闘勝利！強制配転者の原職奪還！反合・運転保安確立の闘いをさらに押し進め、「ＪＲ鉄道部門五万人体制」「貨物八〇〇〇人体制」打倒の闘いへと進撃しよう！

動労総連合９３春闘要求！

１、１９９３年４月１日以降の基準内賃金を４２、０００円の原資をもって引き上げること。

２、配分については、基本給を重点とすること。

３、次の諸制度について改善すること
（１）第２基本給制度を見直すこと。
（２）都市手当の地域区分を見直すこと。
（３）５５歳以上の賃金等について、
① 当面５５歳時の賃金を確保し、ベースアップを実施すること。
② 出向に係わる労働条件について、労働組合と協議すること。
（４）私傷病欠勤の賃金については、欠勤期間を有給とし、休職期間は６割を支払うこと。
（５）割増賃金の単価について、次の率に改訂すること。
① Ｂ単価、１５０／１００
② Ｃ単価、 ５０／１００
③ Ｄ単価、 ５０／１００

５、労働時間の短縮について
年間の総労働時間を１、８００時間に向けて、当面次のとおり改善すること。
（１）「国民の祝日、年末年始休」を休日とし、年間休日数を１２２日にすること。同時に完全週休２日制を確立すること。
（２）１日平均の労働時間について、動力車乗務員は６時間４０分とし、他の勤務種別についても短縮すること。
（３）１２月３０日について、祝日勤務手当を支払うこと。
※５、（３）は東日本のみに対する要求事項

過去５年間のＪＲ間格差（東日本・貨物の対比）

	８８年度		８９年度		９０年度		９１年度		９２年度	
	定昇・ベア	一時金	定昇・ベア	一時金	定昇・ベア	一時金	定昇・ベア	一時金	定昇・ベア	一時金
ＪＲ東日本	4・20%	4・9ヵ月	5・06%	5・1ケ月	5・97%	5・5ヵ月	5・92%	5・60ヵ月	5・57%	5・75ヵ月
ＪＲ貨物	4・10%	4・9ヵ月	4・96%	5・1ケ月	5・85%	5・4ヵ月	5・64%	5・45ヵ月	4・65%	5・10ケ月
東日本との格差	0・10%	――	0・10%	――	0・12%	0・1ケ月	0・28%	0・15ヵ月	0・92%	0・65ヵ月

※貨物に対するＪＲ間格差は、「分割・民営化」の翌年（８８年度）から定昇・ベアに早くも現われ、その３年後（９０年度）以降は定昇・ベア、一時金（夏期＋年末）とも格差拡大の軌跡となっている。９３春闘の最大の課題は、この貨物への格差拡大を断じて許さないことである。

反合・運転保安確立！ 反戦・反核を担う労働運動を！

「大量首切り」攻撃の下の93春斗

九三春闘をめぐる状況は、いまや「大量首切り」攻撃との対決という図式の下に、決定的に重要度を増している。

日本経済が本格的な不況に突入する中、**日経連は年明け早々から、「定昇のみ」を宣言し、「ベース・ダウン」も不思議ではないと「ベア・ゼロ」論を展開している。**

そして「今年の春闘では賃上げよりも、『雇用』を重視する」としつつ、「企業は約百万人もの過剰労働力をかかえている」ー「そもそも終身雇用などという制度はない（日経連永野会長）」と、今般の事実上の指名解雇を押し進める意向さえ表明している。

また、「時短」についても、「生産性の向上が条件」「政府の一八〇〇時間計画は、経済成長と生産性、労働力供給の展望を度外視しては無理」と、**「時短」＝合理化**を明らかにしている。

一方「連合」は、「賃上げで内需拡大・消費喚起、景気回復を」と資本の側に立って、この九三春闘要求について、「七％、二万円」などと、昨年よりもさらに一％要求を切り下げました。八九年一一月の「連合」結成以来、民間主要企業の賃上げ率は、九〇年＝五・九四％、九一年＝五・六五％、九二年＝四・九五％と年々下降の一途をたどっている。今年はすでに「三％台後半中心の攻防」などと厳寒の春闘にさえなろうとしているのだ。

現在の労働者の生活は、過労死が多発するほどの労働強化と低賃金＝生活苦を強要され、戦後最悪の労働条件下にあると言える。こうした状況であるにも関わらず、**「連合」は率先して資本の論理に立ち、「時短」という名の、合理化・労働強化、首切りの推進勢力となりはてているのだ。**

「賃上げゼロ」攻撃を粉砕しよう

バブルで濡れ手に粟のボロ儲けをした資本が、“不況”を理由にして全面的な攻撃に出てきている今日、（九二年の経常黒字は前年比六一・三％増＝過去最高の一一七六億ドル、貿易黒字も二八・七％の一三二六億三〇〇万ドルと最高であったことが大蔵省国際収支速報で報告されている。一方、人員削減＝首切り攻撃は激化の一途を辿り、コダック・パイオニアに続き、日産自動車が九五年春までに座間工場の閉鎖＝二五〇〇名の配置転換、九五年年度末までに五〇〇〇名の要員削減を明らかにし、NTTは九〇年～九三年の四万人合理化計画に続き、九四年から九六年までに三万人を削減し、二〇万人体制にするとしている）「連合」の存在そのものが、労働者を塗炭の苦しみの中に追いやるものである以上、**「連合」自体の解体なくして労働者の生活も労働条件の改善も、大幅賃上げも獲得できないことは自明の理なのだ。**

昨九二春闘の中で、私鉄が「連合」指導部の制動を破って、ストライキに立ち上がったように、**今や抑えつけられてきた労働者の怒りは沸騰点に達していること、「賃上げゼロ」攻撃がその引火点になることは必至と言える。ストライキで大幅賃上げを勝ちとろうではありませんか！**

全国労組交流センター第7回代表者会議かちとる いよいよ力行・エンジン全開へ！

二月二〇日、全国の闘う仲間二〇〇名が熱海ビレッジ（国民宿舎）に結集し、大いに激論を交わしながら、九三年の闘う方針をうち立てた。

結集した仲間たちは、昨年の闘いを貫き一段と自信と確信を固め、同時に愛知交流センター代表・桐村氏宅への襲撃・破壊への腹の底からの怒りを煮えたぎらせ、この怒りを九三年の勝利につなげることを全員が決意した。

「会議」は、議長に関西交流センター代表・入江氏と、東京交流センターの小野さんを選出。機敏な司会で「会議」はひきしめられ、二日間、意義ある会議として勝ちとられる。方針提起を水野事務局長が一時間余りにわたり提起し、その後、二一日午前中いっぱいまで真剣な討論が展開され、その中から「一万人建設」の組織方針をはじめ九三年前半の闘争方針が採択された。

中でも、全参加者の心をゆり動かしたのは、愛知の桐村氏の“報告と決意”である。革マルの卑劣な攻撃を全会員・家族そして支持者が一致団結し、粉砕し、「二・一一集会」の成功を勝ちとった報告に、全員が熱烈な拍手を送り、今後全国で反撃に立ちあがることを誓い、直ちにその場でカンパも集められた。

今、世界的激動の到来と自衛隊の海外派兵という時代への突入の中で、改めて交流センターの位置の大きさを明確にし、その時代の要請に応えきるために、総力で奮闘することを全参加者が決意し、大成功のうちに終了し、全国に散った。

動労千葉は、この闘いの中軸を担うことをきっぱりと宣言し、前進しよう！